

## 序章

本グループでは、春学期においてメンバー各自が「国内の貧困と格差」というテーマの下で、関心の高い問題について調べ、持ち寄り、勉強会を重ねた。そうした勉強会を通して、全員が少なからぬ関心を抱いているのが「野宿者」の問題であることがわかり、特にその現場について知りたい、関わりたいというのがメンバーの共通した思いだった。そこで、秋学期では主に野宿者問題の現場を知ることには主眼を置き、山谷地区における野宿者支援団体の活動に参加した。

「山谷」地区とは、泪橋交差点を中心に荒川区と台東区の南北に広がる地域である。日本の高度経済成長に伴って、労働需要が高まり、全国有数の寄せ場（日雇労働市場）に成長した。しかしバブル経済崩壊後、労働需要は急減し、さらにかつての日雇い労働者の高齢化が進んだことで建設現場などでの肉体労働が困難になり、現在では路上での生活を余儀なくされる高齢者も増加した。

本グループの研究では、メンバー6人の共通した土台としての山谷という野宿の現場を出発点に、「日本国内における野宿者問題の現状」に関して複数の切り口から考察を試みたい。

プロダクトの構成としては、まず、第一章の第一節で山谷の歴史についてまとめる。時代を遡って山谷の歴史を紐解くと同時に、第二節で野宿者の存在と問題への対策を国際比較から考察するのがこの部分である。第二章では、山谷を主要事例として第一節で行政、第二節で民間団体それぞれによる野宿者支援について考察を試みる。最後に、第三章では、若干の応用的考察として、第一節で全ての人がベッドで寝ることを保障されているといわれるニューヨーク州での野宿者支援が山谷を含む東京都による支援の参考になるかどうかを検討する。第二節では、子どもと野宿者との「出会い」に関する考察を行う。

また、補論として、上智大学生の野宿者問題に関する意識調査結果を掲載する。これは、2011年1月29日に行われた「身近にあるホームレス問題と民主主義」というシンポジウムでの発表を目的として、上智大学生500人超を対象に行ったものである。終章においては、山谷との関わりを通してメンバー6人が感じたものをそれぞれの視点からまとめる。各自が一大学生として野宿の現場に関わることを通じて感じたものやことを率直に表現する場として意義あるものと捉えている。

以上のようなグループ研究の流れ、プロダクトの概要からわかるように、本グループのプロダクトは、各自の研究テーマをまとめたレポートと主観的感想を表現したものとを合わせたブックレットというかたちを取る。